

法話

『千の風』の禪的吟味

丸川 春潭

1 はじめに

昨年(平成18年)の大晦日の紅白歌合戦において『千の風になって』(以下『千の風』という)が秋川雅史さんによって歌われて以来大変な人気でミリオンセラーになっているそうではありますが、私が初めて聞いたのは、四国での冬期学生修禅会で玉淵さんが歌ったときでした。

初めて聞いたときからこれは良い歌だと思いましたが、特にその歌詞が「私のお墓の前で泣かないでください、私はそこにはいません」「私は死んでなんかいません」とドキッとする歌詞が印象的であるし、深いものがあると感じておりました。

そしてCDを買って教えてもらいながら、今年(平成19年)の5月の前総裁青嶂庵荒木古幹老師の教

千の風になって

作 詞：不 詳
作 曲：新井 満
日本語詞：新井 満
歌：秋川雅史

私のお墓の前で 泣かないでください
そこに私はいません 眠ってなんかいません
千の風に 千の風になって
あの大きな空を 吹きわたっています

秋には光になって 畑にふりそそぐ
冬はダイヤのように きらめく雪になる
朝は鳥になって あなたを目覚めさせる
夜は星になって あなたを見守る

私のお墓の前で 泣かないでください
そこに私はいません 死んでなんかいません
千の風に 千の風になって
あの大きな空を 吹きわたっています

千の風に 千の風になって
あの大きな空を 吹きわたっています
あの大きな空を 吹きわたっています

団葬の後に、追憶してこの歌を歌わせていただきました。秋川さんの歌がまた素晴らしく比べものになりませんが、聞くだけではなく自分で歌ってみると、また一層この歌の深みを感じておりました。

ところが、6月20日の朝日新聞に6段抜きで「『千の風』なぜヒット」なる記事が出まして、私のこの歌の歌詞についての解釈、そしてこの歌がなぜこれほどまでに多くの人に共感を与え歌われているのかについて私の考えていたことと、この記事の何力所かにおいて違和感を感じ、問題意識を持ちました。ちょうど学生修禅会があるということで、そこで私の考えを法話としてお話ししようと思いついた次第であります。

2 朝日新聞の記事「『千の風』なぜヒット」へのコメント

その違和感の最初は、最近ヒットした『千の風』の翻訳・作曲をされた新井満氏の言葉として「死者が生者を思いやる。その発想に驚かされた」「万物に精霊が宿するというアニミズム。どんな人にも最古層にある宗教観だ」「やおよろず八百万の神という言葉があるように、日本人になじみがある考え方を目覚めさせたのではないか」なる記述部分であります。

これに対するコメントの前に、新井満氏が翻訳・作曲される約10年前に南風椎氏が訳された『あとに残された人へ 1000の風』（1995年初版）と元の英文の詩を次のページに紹介しておきます。

英文に忠実に翻訳しているのは、南風椎訳『あとに残された人へ 1000の風』の方であり、最近の新井氏のものは、歌になりやすいようにさびの部分の繰り返したりして元の詩から大きく変わっております。それはいいとして、新井氏の記事で見る限りの発言「死者が生者を思いやる。その発想に驚かされた」については、この人は原作者の心が分かっていないのではないかと思いますし、詩人ではなく歌をヒットさせる人ではないかと考えてしまいます。また「やおよろず八百万の神とい

う言葉があるように、日本人になじみがある考え方を目覚めさせたのではないか」の発言は、この原詩が日本だけではなく、多くの国で翻訳されて支持されている事実を無視した思いつき発言と考えられます。

次に、日蓮宗住職・現代宗教研究所主任 伊藤立教和尚の「アニミ

あとに残された人へ 1000の風

作詞：不詳
訳：南風 椎

私の墓石の前に立って涙を流さないでください。
私はそこにはいません。
眠ってなんかいません。

私は1000の風になって吹きぬけています。
私はダイヤモンドのように雪の上で輝いています。
私は陽の光になって熟した穀物にふりそそいでいます。
秋にはやさしい雨になります。

朝の静けさのなかであなたが目覚めるとき
私はすばやい流れとなって駆けあがり
鳥たちを空でくるくる舞わせています。
夜は星になり、私はそっと光っています。

どうか、その墓石の前で泣かないでください。
私はそこにはいません。
私は死んでいないのです。

A THOUSAND WINDS

Do not stand at my grave and weep,
I am not there, I do not sleep.

I am a thousand winds that blow,
I am the diamond glints on snow.
I am the sunlight on ripened grain,
I am the gentle autumn 's rain.

When you awake in the morning hush,
I am the swift uplifting rush of quiet in circled flight.
I am the soft star that shines at night.

Do not stand at my grave and cry.
I am not there, I did not die.

ズムでは『死』に対する安心が得られなかったが、自然宗教を脱した
 仏教やキリスト教などにより『死』の意味づけが明確にされた」「成
 仏や浄土があることで安心して臨終を迎えられ、残された人も葬儀や
 回向という儀礼を通じて死者と向き合えるのが仏教である」「亡くな
 っても生きてほしいという『千の風』に表れる気持ちは、未練が
 どこまでも残ってしまうように感じてしまう」の記事には、正直言っ
 てびっくりしました。やはりお寺さんはこういう考え方をするのだな
 あと改めて感心しました。

私は、日蓮宗が問題と言っているのではないのですが、このお方は
 この短い記事の言葉から推察して、仏教の基本が分かっていないの
 ではないかと思えます。「死」のとらえ方が仏教を開かれたお釈迦様の
 悟りとかげ離れているのであります。ただ人間の「死」に関わって飯
 を食っている葬式行事執行屋さんと、日本人がこの歌のような死生観
 になったら商売がお手上げだと正直に仰おっしゃっているわけでありませう。

最後にもう一つ、朝日はインタビュー記事を載せています。東京大
 学島藺進教授（宗教学）は、『千の風』の世界観に比べて、日本の今
 の世風せいふうを「死者と生者の関係が非常に近く、個人的だ」と言い、これ
 までの日本は身内が亡くなれば、通夜などに縁者が集い、飲食を共に
 しながら、死者の思い出を語り、悲しみを癒やしてきた。さらに先
 祖を供養し、墓を大事にすることで、「家」というシステムにおいて
 死者との一体感を維持していた。だが、そうした共同体の機能はどん
 どん失われており、「死者との交わりが個人的になり、痛みや苦し
 むを個々人で抱え込んでしまっている」と現代の世風を分析し、「風に
 なって空を吹きわたっている」死者との交流がストレートに胸に響く
 のである。だが「『千の風』の世界は、風通しが良くて広々としてい
 る。でも同時にさびしさを感じてしまう」と仰おっしゃっております。

現代日本の世風の分析はさておいて、宗教学教授として、この詩の
 持つ宗教性についての論究が「風通しが良くて広々としている。でも

同時にさびしさを感じてしまう」だけでは、あまりにも貧弱であると思っただ次第であります。

3 この詩のルーツの考察（死生観と一神教、多神教）

この詩はアメリカの新聞で紹介され、たちまち語り伝え歌い継がれて世界に広まったようですが、作者も作詞時期も未だに不明であります。したがって、まず作者は故人であり、その縁故者もないということは間違いないと考えられます。そして、この作者はどういう人かと私が考えますのに、キリスト教などの一神教の教徒ではないのではないかと考えます。

私の独断ですが、この詩は北アメリカ大陸の先住民族であるアメリカインディアンが持っていた詩であるかもしれないと考えております。これと似たような、詩ではありませんが、アメリカインディアンの古いことわざ諺に次のものがあります。

「We do not inherit this land from our ancestors. We borrow it from our children.」(我々は、この大地を先祖から相続しているのではない。我々は、この大地を子孫から借りているのだ。)

アメリカインディアンは多神教であると聞いております。したがって日本の神道に似た自然崇拜が根底にあると思います。南風椎訳の詩からこの原作者の思想は、一神教ではなく、多神教それも自然信仰の感じがいたします。そしてまさに詩人の感性で、自然を大事にする思想から自分が死んだらやはり自然に帰るのだという自分の気持ちを、ストレートに詩にしたのではないかと思われてなりません。

4 科学 芸術（詩） 宗教（禅）

科学は相対的に解析的に追究し、客観的に知性的にも物を見て、他の人にも正確に言語や活字で表現し伝えることができますが、宗教は絶対的であり宗教の真理は言葉や活字で表現することはできないもの

であります。では芸術（詩）はこのどちらに近いのでしょうか？

耕雲庵立田英山老師の引退される前の最後のご提唱が、約30年前になります。思い出されます。「禅の境地は普通の言葉や活字で表すことは不可能である。唯一、詩とか俳句とか短歌とかの文学的な表現は、その不可能を乗り越える手段である。日常の中でこれらの詩とか歌とか俳句で禅の境地を味わうことは、人間形成を進める上においても、日常生活の充実感・満足感を味わう上においても有効であるから、それらの何かを趣味にして日常でそれを使い味わうようにすると良い」

『千の風』の作者は、自分の気持ちを詩の形を借りて表現したのであり、本人が意識してはいないかもしれないが、その切り口とテーマが人間生存の^{きんせん}琴線に触れるものであり、そして極めて宗教的であったのであります。だからこの詩が瞬く間に世界に^{ひろ}拡がったのであり、日本もその例外ではなかったということと判断できます。

5 『千の風』の禅的解釈

では、この詩を禅的にどう解釈するかのお話しに入ります。

(1)「私はお墓の中にいません」「お墓の中で眠ってなんかいません」「私は死んでいないのです」

私は、この作者は詩人の感性で「不生不滅」なるものをかなりの確信を持って^{つか}掴んでいると見ます。それは禅門での六祖慧能大師の「父母未生以前に於ける本来の面目」、白隠禅師の「隻手音声」の悟りの切り口であります。「本当の自分探し」という言葉がありますが、「生」と「死」を貫いている不変のものを詩人の感性でしっかりと^{つか}掴んでいるから、まさに人間の根本的な課題である「必ず死ななければならぬ」という命題に真正面から自信を持って答えを出しているのだと思います。

(2)「千の風になって吹きわたっています」

このフレーズの取り扱いについては、翻訳者新井満さんと同じ取り扱いが良いのではないかと考えます。すなわち、「秋の光」「きらめく雪」「鳥になって」「星になって」とは別格に取り上げているのであります。

「個の死」はまさに「不生不滅」「不易」の対局にあるもので、禪門でいうところの典型的な差別の切り口であります。不易に対する流行であり「山は高くそび聳え、川は低きに流れている」「強者も弱者も、金持ちも貧乏人もいる」「生もあれば死もある」切り口であります。しかし、この詩人は「個の死」が「千の風になって大空を吹きわたっている」と見るわけであります。風というのは空気の動きで、全く動かない時もあるが、強く動いて家をも吹き飛ばす時もあります。止まったときも、猛烈に吹いているときも、空気に変わりはありません。私たちが無意識に呼吸している空気も千の風の一つです。どこにでもあるし、こうした意味でまさに不生不滅であるとも言えましょう。すなわち「個の死」が、即「不生不滅」であると詩人の感性で見切っているのであります。

仏教のお経に『般若心経』というものがあり、このお経の核心部分は「色即是空 空即是色」であります。生命学者(分子生物学専攻)で難病かがに罹られ、独力で仏教・『般若心経』を勉強され、自分なりの確信を得られ、病も克服され、その体験とご自分の確信を多くの著書にされ、それがことごとくヒットしテレビでも引っ張りだこになっている時の人 柳澤桂子博士が『般若心経』を解釈し『生きて死ぬ智慧』という著書にされています。その解釈は分子生物学者らしく、すべての二元的な考え方(差別の切り口)に対して、すべてのものは原子・分子から出来ており、その点で一元的に見る見方を彼女なりに悟ったのであります。これはまさに「色即是空」を極めたということであり

ます。

これは、先の「個の死」は二元的な典型であるが、またこれを一元的な切り口で見ると普遍的に「千の風になって大空を吹きわたっている」という表現になり、まさにこれも同じ「色即是空」であります。

(3)「秋の光」「きらめく雪」「鳥になって」「星になって」

千の風という普遍的な表現からガラッと変わって、千の風が一転して「個」の形になって表れるというのであります。即ち柳澤桂子先生の二元が一元になって、また二元として表れるというのであります。まさに、これは「色即是空 空即是色」に他なりません。柳澤先生は、悲しいかな「色即是空」までで止まっているのであります。これは『般若心経』の世界の半分ということではない。「色即是空 空即是色」がセットでなければ意味がなくなる、言い換えれば「空即是色」が分かって初めて「色即是空」も深く掴めるとい^{つか}うものであるからです。

それに対してこの千の風は、一元からまたそれが、ある時は「秋の慈雨になり」、「冬にはダイヤのようにきらめく雪になり」、「朝は鳥になり」、「夜は星になる」ということで二元に帰ってくる。科学者は解析的に分子・原子に分解してその共通点(一元)に到達したが、詩人は、ある時は普遍的な風になるが、また自由に個別の姿になって(二元の切り口でこの世に)現前するという『般若心経』の世界「色即是空 空即是色」を見事に見破り、そして多くの人に分かりやすく美しく歌い上げているのです。

6 「生死を超える」とはどういうことか？

お釈迦様が社会的なしがらみを捨て、女房・子供と別れて出家して、生死の結着の道を求めて修行し、12月8日の暁の明星を徹見し、生から死への連続している切り口を見ることができた。そして「山川草木悉皆成仏」「天地と我と同根、万物と我と一体」と述べられた。自分

と山と川は一体であり、同根だったということをつかまされた。柳澤桂子先生の一元化の切り口であり、死して千の風になる端的であります。

逆に言って「生から死へ」において、どの切り口で連続しているのかという答えをハッキリ見ることができれば、山川草木、木や石と自分との間の共通項、同一性がハッキリ分かり、見える。そしてまた「天地と我と同根、万物と我と一体」を本当に悟れば、生死の命題に対する答えも自分の^{たなごころ}「掌」を見るがごとしであります。これを禅では見性といい、見性によってこそ生から死への連続する大自然の命をはっきりと見ることができ、人間の最大の問題である「生死」から解放され、「生死を超える」確信を得ることができるのであります。『千の風』の作者は間違いなくこの確信を得て、高らかにこの詩を歌い上げたものと考えます。

生と死に共通する切り口は、相対的に、哲学的にいくら究明しても見えてこない。^{せきがく}碩学の大宗教学者と^{いえど}雖も、この切り口を容易に見ることはできませんが、学問のない人でもしっかりと見定めることができます。なぜなら生と死に共通するものは、絶対性の切り口でしか見えないのであり、学問的に相対的にいくら追求しても見えないものです。

人間がその本性である考える葦の機能を意識的に停止させて、すなわち相対的な思考を一時棚上げにして、数息観とか公案に、足のつま先から頭の素てっぺんまで成りきる。成りきっていることも忘れて、人が何を感得できるか。相対を離れた絶対を感得できる唯一の道が、三昧の中に架け橋として敷かれているのであります。三昧の橋を渡って絶対の見地に至れば、生と死の連続性をはっきりと見え、すべての宗教の原点にもたどり着くことができるのであります。

人間は相対的に科学し哲学するだけでなく、実に、絶対性も感得できる動物なのであります。そして宗教家でなくとも、科学者でも、詩

人でも、三昧の橋を渡って絶対性を感得でき、「一元である」ことを、また普遍的な「千の風」になることをはっきりと見ることができるのです。

生から死への連続した共通項が分かれば、本当の自分というのは^{たなごころ}掌を返すように、なるほど、これだ!!とはっきり^{つか}掴むことができる。そうすれば、これからどう生きていいのかということが分かってくるし、死というものの位置付けも見えてくる。これで本当の自己が確立され、本当の自分探しが完結するというものであります。

動いているものの認識は、止まっているものが分らなければ判らない。死というものが本当に分らなければ生が判らない。死というものが本当に分らなければ、生の貴さ・重さが本当には判らないのであります。

生死という相対は、即、不生不滅という絶対に裏付けられている。不生不滅は、生死の相対の中に宿っているのであります。

この詩人は、自分は死んだら普遍的な千の風になり、それはまたある時は雨にも雪にも光にも鳥にもなって生き続けていると直感し、確信しているのであります。本人はおそらく体系立てではないのでしょうが、『般若心経』の真髓を感性でもって^{つか}掴んでいるのであります。

7 おわりに 『千の風』に布教を考える

(1) 人の生死に対する悩みや迷いの救済にどれだけ寄与できているのか？

現代ほど死が^{おろそ}疎かに軽く扱われる時代はない。それは裏を返せば、命の尊厳が地に落ちているということでもある。そしてどんなに文明が発達し、情報化社会になり、ヒトゲノムが解読されても、人間は死ななければならない。どんなに忘れようとしても、何かに没頭しても、死の恐怖からは逃げることはできない。潜在意識の中にしまいこんでいた死の命題を堂々と取り上げる詩が高らかに歌い出されたのである

から、まさに現代人の心の砂漠に雨が降るように染み込んでいったのであると私は解釈しております。しかも似^え非^せ宗教家よりも正しく生死の問題を把握して歌っているのだから、理屈も道理も必要なく、悩み迷える現代人は癒やされるのであります。

私は禅者として、この『千の風』を禪的に評価するだけではなく、仏教徒の端くれとして、大いに反省するところがあります。お釈迦様は「衆生病むが故に我病む」と言っておられ、大乘仏教のあり方を示しておられます。われわれが禅の正法を継承していると言って『千の風』を正しく評価しても、迷える現代人の救済にどれだけ役に立っているのか？ 柳澤桂子さんの『般若心経』の解釈の深浅を正しく論評したとしても、実際に多くの日本人の共感と救済に力を発揮しているのは柳澤桂子さんであります。そして作者不詳でありますアメリカの詩人を初め、これらの方々がどんなに多くの人の心の救済に力を発揮したか計り知れないのであります。

わが教団は居士禅者の集まりであり、あらゆる職種において社会の構成員として責任を果たしつつ、禅によって人間形成し力を付けて、より役に立つ人間になろうとしており、この現世において「世界楽土を建設」しようとしておりますが、「転迷開悟の実を挙げ」て、悩み苦しんでいる人をどれだけ救済できているのか？ お釈迦様の未^{まつ}裔^{えい}でありながら、迷える人を救済する力が足りない。誠に恥ずかしい次第であります。

(2) 『千の風』に学ぶ

まさに『千の風』に学ぶべきことは大にあるのであります。自分の人間形成のために、難しい提唱録を読み、著^{しゃく}語^ごを『禅林句集』で勉強するのはいいのですが、それは自利のためだけでなく、利他にはほとんど役に立たないものであります。仲間内にしか分かり難い提唱を十年一日のごとく繰り返しているだけでは（これはこれで必要

ですが)、悩み迷い求めている多くの人々の力にならないのであります。正脈の伝法を伝法のための伝法に終始することなく、現世に世界楽土を建設する旗印を下ろさないのであれば、何をやらなければならないのか？ 布教ということは、自分たちの仲間を増やすということではありません。自分の得た徳力を他に回向して、迷える人を救い、落ち込んでいる人に元気を持っていただくことであります。

輔教師・布教師の方ももちろんのこと、見性したということのすごさを振り返って見て、見性した人なら身の回りの人、家族に、職場の人たちに、友人に「近頃君は輝いているが、何しているんだ？」と言われるはずであり、布教といっても基本はその人の香りであります。まずは、その人となり分かる範囲の回りの人に対して、自分が得た素晴らしい法悦の香りを^わ頷かつところから布教は始まるのであります。

また情報化社会における不特定多数に対する発信の場合は、万人に容易に理解できるものでなくてはならないでしょう。『千の風』にしても、柳澤桂子先生にしても、禅書で売れっ子の高田明和先生の文章にしても、実に読みやすく万人向きであります。考えてみれば、禅には^{しろうと}素人のお方の方が難しい宗教的専門用語を使わないで、日常の言葉で語っているのが良いのかもしれません。活字だけではなく劇画も有力なツールと思います。すべての芸術の中に深い本物の香りを入れることができるということを、そして感動を伝えられることを『千の風』に学ばなければならない。

明日を背負う若い人は、自分の感性で考え、自分の言葉でどんどん発信して、老若男女を巻き込む大きな渦を巻き起こしていただきたい！

合掌

(平成19年8月4日、板東道場における夏期学生修禅会の法話より)

著者プロフィール

丸川春潭(24ページ参照)